

二〇二六年度入学式 学長式辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。ご父母、保証人の皆様にも、心よりお祝い申し上げます。本日、経済学部、経営学部、理工学部、文学部、法学部、そして新設の国際共創学部の六学部、さらに経済経営研究科、理工学研究科、文学研究科、法学政治学研究科の四研究科を合わせ、およそ二一〇〇名の新入生の皆さんをお迎えできましたことを、誠に嬉しく存じます。

学部生の皆さんは、それぞれの専門分野への第一歩を踏み出されました。また大学院へ進学された皆さんは、専門知をさらに深め、新たな知を創造する段階へと進まれました。本学の大学院は研究の場であると同時に、知の探究を通じて社会に貢献する人材を育てる場でもあります。どうか高い志を持って研究に取り組んでください。

本学はワンキャンパスのもとに人文科学、社会科学、理工学が集う総合大学です。全学共通の成蹊教養カリキュラムを通じ、文理複眼の教育を実践してまいりました。本日第一期生を迎える国際共創学部と既設五学部との間に生まれる新たな連携と広がり、大きな期待を寄せています。

ここで申し上げたいのが「シナジー効果」です。シナジーとは、複数の要素が組み合わせること、単純な足し算を超えた成果が生まれることをいいます。よく「1+1が2ではなく、3にも4にもなる」と表現されます。昨年ノーベル化学賞を受賞された北川進博士の御業績に関して、老荘思想と現代化学との間に見られる興味深い事例が紹介されていました。

老子には次の言葉があります。

埴をこねて以て器をつくる、其の無に当たりて器の用有り

粘土をこねて器を作る。その器の中に何も無い空間があるからこそ、器は役に立つ、という意味です。器そのものが有用なのではなく、内部の「空（くう）」があるからこそ、水を入れ、何かを受け止めることができる。老子はこの逆説をもって、「無こそが用をなす」と説きました。この思想に親しんでいた博士は、物質それ自体だけでなく、その内部に存在する「空間」や「隙間」に着目しました。その結果、一見何も存在しないはずの空間こそが、物質の性質を決定づけ、新たな機能を生み出す鍵であることを発見したのです。ここに、古代の哲学思想と最先端の自然科学が響き合い、新たな知を生み出すという、まさにシナジー効果を見ることができます。

成蹊大学は、大学の学科・専攻において、経済数理、現代経済、総合経営、法律、政治、英語英米文学、日本文学、国際文化、現代社会、データ数理、コンピュータ科学、機械システム、電気電子、応用化学といった多様な学びがなされています。ここに、国際日本学と環境サステナビリティ学を加え、さまざまなシナジー効果が本学において産まれていくことを期待しています。どうか皆さん、大学生活において効率や即効性のみを求めることなく、自らの専門の「外側」にも目を向けてください。異なる分野、異なる立場、異なる考えとの出会いの中にこそ、新しい発想が生まれます。

そしてまた、老子の言う「無」のように、余白を大切にしてください。忙しさを埋め尽くすのではなく、考える時間、対話する時間、静かに思索する時間を持つことが、皆さん自身の中に新たな力を育てます。皆さんの学びの日々が、互いに響き合い、思いがけない成果を生み出す豊かな時間となることを、心より願っております。

新入生の皆さんの学びの日々が、実り多きものとなることを心より願い、お祝いの言葉を結びます。

二〇二六年四月三日

成蹊大学長 森 雄一